Kate Chopin vs. Feminism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米塚, 真治 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4200

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ケイト・ショパン vs. フェミニズム

米 塚 真 治

今年 1996 年度の授業では Charlotte Perkins Gilman "The Yellow Wallpaper"から始めて，富島美子，小倉千加子の評論を挟み，翻訳でケイト・ショパンの『目覚め』「あらし」「一時間の物語」を扱った。学生（女子短大生）にとって，フェミニズムを把握し自分なりのスタンスを定めることも必要だろうと考えたのだ。

そこで改めて確認することになったのは，学生の中にフェミニズムに共感しない者が少なくない —— 反感を抱く者が多いという現状であった。骨のある学生ほどフェミニズムへの嫌悪を口にする。なんとも皮肉であるが，ある種のロマンティシズムとしてフェミニズムを受容するのは従順でよく言うことを聞くタイプの学生なのである（この女性たちこそ，フェミニストに「目覚めていない」と批判されており，しかもこれで「目覚める」かといえば，男性の言い分も同じように飲んでしまう人々なのだが……）

学生がフェミニズムを嫌う理由は理解できる（後述するが，ポストモダニティ問題の一種だと思っているので）。ただ，にわかに首肯できなかったのはケイト・ショパンの小説をフェミニストの冊子と同一視して批判されたことである。事実を言うならショパンはフェミニズムを含む社会改良運動には決して参加しなかった（通常，イデオロギー嫌いゆえと説明される）。これは，フェミニスト批評がショパンをリバイバルさせたのと同じくらいに重要なことだ。ショパンとフェミニズムの関係を云々するときには慎重さが要求されるわけで，エレイン・ショウォールターはこの点に注目し，『目覚め』の結末で主人公エドナが入水し陸から遠ざかって行くシーンを，著者のフェミニズム運動からの孤立（さらに永年にわたる作品の孤立）の暗喩と読んでいるほどだ。[1)]

手続きとして必要なのは，ショパンの思想がフェミニズムと同一かどうか再度検討し，その上で，学生が両者に共通するいかなる要素に反撥しているのか，差異の部分になぜ反応しないのか把握することであろう。

本稿の論述は以下のように進む。①ショパン＝フェミニズムという前提から出発しないために，『目覚め』について現代フェミニズム批評以前，同時代の書評をいくつか検討する。作品の鍵となる概念について，フェミニスト批評で自明とされるのとは異なった把握ができるはずだ。②①を踏まえて，ショパンの思想をいかなる文脈で理解するのが適当か考える。従来言われているリージョナリズム（ローカル・カラー）とフェミニズムの文脈を検討するが，さらに広く，同時代の西欧形而上学という視野を導入するとどうなるか。③評価。(a) 世紀の変わり目という時代において，実存主義の先駆として評価する。(b) 現代において，ポストモダニティとフェミニズム批判を背景に新たな受容と評価を考える。

同時代の書評

紹介するのは *The Awakening* の Norton Critical Edition (2nd ed.)に収められている『目覚め』書評から二つである。この他合計十六に上る書評は同時代がいかに無理解であったかを証明しようと収録されているのだが，[2] その意図と別に虚心に読んでみると有意義である。

批評家であれ学生の素朴な疑問であれ，現在の読者が『目覚め』で不審に思うのは，①エドナの「目覚め」における性の役割。②何の説明もなしにエドナが自殺する理由。③エドナが夫と対決しない理由，の三点なのだが，以下の評で注目してほしいのは「目覚め」についてのそもそもの考え方である。

「ピッツバーグ・リーダー」の書評

評者はウィラ・キャザー，論旨は以下の通り。――『目覚め』の主人公エドナは少女時代の恋愛空想が嵩じて悲劇役者のポートレートにキスするまでになり，それに対する反動として現在の夫レオンスと結婚する。別荘の家主の息子で野心家のロベールは客たちに愛敬を振りまくのが仕事であったが，クリオールの調子よさに慣れていないエドナはてっきり本気だと誤解してしまう。頭の悪そうな女に思いつめられて恐くなり，ロベールは据膳を置いて逃げ出す。残されたエドナは出会った思い出の場所である海へ行き，アンナ・カレーニナが鉄道自殺するのと同じ動機で入水する。『目覚め』は『ボヴァリー夫人』をいささか粗雑にしたものといえ，テーマは同一である。中途半端に頭脳を持つある種の女は，現実離れしたロマンスを求め続けるものだ。

直観に優れるが理性が不十分なので，感情を思考がおしとどめるかわりに，感情と思考が一体となって増幅しつづける。現実と芸術と知的な営みと，それぞれに楽しみを求めればいいものを，この女たちは恋愛を過度に理想化し，恋愛にすべてを求め現実と妄想の境界を失う。当然すべては得られず，緊張を強いられた神経はやがて限界に達して「目覚め」，自分を滅ぼすのが成り行きである。ただしエドナは自殺するときもロマンティックでありつづけようと，毒を呷るかわりに夏の夜の海を選び，恋人の声やピンクの花びらを空想しながら死んで行くのだ。[3)]

「リテラチャー」の書評

クリオールの人々の（東部と違い）気のおけない付き合いをショパンはうまく描いてきた。クリオールの男は妻の付き合いに嫉妬したりはしない。右手が左手を嫉妬しないのと同じことだ。だが，そんな男の一人を妻が裏切って恥じぬ物語を書いたことで，ショパンはこれまでの実績をだいなしにしてしまった。「妻は少女時代の恋愛妄想への反動として結婚した。このため，結婚生活や母としての立場も彼女にとっては束縛とはならず，さらにほかのものへと惹かれていったのだ。物語はこの浮気と，そして最後の目覚めを描くのだが，陳腐さはぬぐえず，姦通の言い訳にはまったくならない。目覚めは予想通り悲惨なものとなった。よるべき係留地のすべてから離れて漂い，しかも後悔するほどの徳性すらない女の頭上を，海水が閉ざすことになるのはけだし当然の結果であろう」[4)]

目覚めること＝夢見ること

ご覧のように，基本的に古典主義的な文芸批評のスタイルである。文学かくあるべしという評者の規範（審美的・道徳的基準）が前提としてあり，評者はその規範に照らして作品を裁断する。同じ edition に収められた他の評には，「姦通の誘惑に負けなかった」ロベールを高潔な男と評価するものも幾つか見受けられてなかなか衝撃的である。これに比べれば現代の評ははるかに「適正」になった。エドナの死を懲罰と読む人も，目覚めを罪の自覚と捉える人もいない。[5)] しかしこの「適正」化は，風呂の水と一緒に赤ん坊も流してしまったような気がしなくもない。

確かに，「目覚め」が罪を自覚することだという同時代の読み方は，誤読

に過ぎない。しかし同時に，エドナは目覚めていない，少女のような夢を見ているのだ，という同時代の指摘も正しいのである。キャザーは，めざめよ（現実というものに目覚めろ，ガキを卒業して大人になれ）と言っているが，立場を変えればこの作品で肝腎なのは主人公が「目覚めていない」ことだと看破しているわけで，作品を「裁断」する古典的批評ならではの慧眼である。

エドナは眠っている。ヨリ正確に言うなら，ずっと眠っていたわけではない。夢のことを語り始めるのは，ラティニョール夫人の抱擁に心を開く第7章からである。女性たちとの交流が性の目覚めにつながって行く以上，めざめることと，少女時代の夢を取り戻すことが並行しているのである。ロベールと海に入った夜，エドナは「非常に楽しくて，グロテスクで，あり得ない夢」に浸るが，夫がそばで葉巻を吸うと「現実が再び彼女の魂に押し寄せ始めているのを感じ始めた」。[6]

目覚めることは夢見ること。これが何を意味するかといえば，男に押し付けられたプロットを拒否し，言語に分節される以前の世界に回帰を志向することだと言えようか。この読み方は，ショパンをリージョナリズム（ローカル・カラー）の文脈に位置づけることになる。この文脈に入るジューエット，フリーマンなどの作家は南北戦争後，生き馬の目を抜くように変化して行く社会に嫌気が差し，疑似レズビアン連続体を形成してロマンティック・フレンドシップと母娘関係のなかにフェミニンな価値を見出そうとした，とされる。『目覚め』についても，主人公とラティニョール夫人やライズ嬢との交流に多分にセクシャルな要素があることは否定しがたい。

しかし，この読みは文学史的にも，作家の経歴から言っても，作品を見ても完全には適合しない。ショパンは青年時代にはリージョナリズムの影響下にあり，個人的にも寄宿舎の同窓との間にロマンティックな友情を結んだけれども，以降はひとつ先の世代として，フェミニストと並んで男社会に伍していこうとしたというのが一般的な把握であろう。作品を見ても，主人公の死は夢であるにせよ，唐突な死に込められたシニシズムはこの読み方では説明しがたい。ことはそう単純ではない，というところだろう。

不　安

この作品で「夢」以外に大いに気になるのは，目覚めとともに主人公を襲う「不安」である。女はこれまで十分な教育を受けなかった，だから目覚め

ても将来の見込みが立たない――メアリー・ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』冒頭でそう記したが，不安の原因をそこに求めれば，ショパンをフェミニストの系譜に連ねることになる。エドナは目覚めたとはいえ，とたんに女の立場を主張できるわけではない。あるいは，現在の若者に見られるように「あたしがこの程度の女であるはずがない」と自己主張を始めるわけでもない。女は現状では，もっと弱いのである。

何が女の解放になるのか。分節されない，言語以前のものとつながりを回復することか，それとも言葉を持たない不幸を克服して，分節された言語を獲得することなのか――これはフェミニストとしての流儀の問題である。後者を採る同時代のフェミニスト，シャーロット・パーキンズ・ギルマンの代表的短篇「黄色い壁紙」では主人公の夫が精神科医であり，妻が人生で演じるべき「プロット」やプロットの解釈を用意している。やがて夫に敷かれたレールの上に乗せられていることに気づいた主人公を襲うのは，「不安」を経てやがて狂気である。フェミニスト・リーディングはかつてアネット・コロドニーがギルマンを読んだようにショパンを読み，男に独占されている分節された言語を，いかに女の手で獲得するか，同時に「海」の表象するフェミニンな混沌や身体性をいかに克服するかという課題を読み取る。[7]

だが疑問は残る。ギルマンと異なるのは，『目覚め』の主人公の夫ポンテリエ氏は明瞭なプロットを持たされていないことだ。彼が個人として責任を追及されることはない。エドナは早い時期に夫と衝突するが，そのシーンで最後にクローズアップされるのは，床に投げつけても傷一つつかない結婚指輪に表象される「制度」である。その後主人公は家庭から「独立」し，男と直接対決して問題を明らかにできるはずの機会は不自然に回避されるのである。独立後，エドナは夫を何も恨んではいない。

この回避をフェミニズムの枠内で説明しようとすれば，よほどの力業が必要となるだろう。目覚めたときのエドナの不安が，章を追うにつれ倦怠感や失望感に置き換わって行く，その推移がフェミニスト的な問題意識に根差しているのは明らかだが，葛藤が自意識のレベルを出ないので著しく抽象的な印象を与えるのである。それでもなお男と対決させないのはなぜか。

『目覚め』はリージョナリズムの女性共同体の文学，フェミニズム，特に後者とほとんど重なり合いながら説明できない部分を残している（自然主義に

ついても同様)。[8] この点を説明する鍵は，実存主義だと考える。先述したウルストンクラフトの「不安」とリージョナリズムの「目覚める／夢見る」の図式に実存主義の不安を上書きすると，ストーリーは以下のように解説できる。

ハイデッガー『存在と時間』に依って述べれば，人間は実存として本来の姿にあるとき，何に自己投企してよいかわからず不安の状態にある。そこで，本来性の世界を去り，語りと事実性の中へと逃避している者が大部分である(この状態を頽落という)。何かのきっかけで本来性に目覚めた少数の者は，猛烈な不安を覚えるのである（あるいはサルトルのロカンタンなら「嘔吐」する)。

性を非日常の契機にしてショパンの主人公に起こったのは，この本来性への覚醒であった。ふだん事実性の世界にしっかりと目覚めていることは，頽落の状態にほかならない。夢見ることこそ，目覚めることであるという逆説は，そこに生まれる。具体的に言うなら，ショパンにおける覚醒は，今まで自明の日常として存在したものがふと欠如したとき，それなしでもやっていけることに気づくという形で現れる。一種のエポケーである。

覚醒と同時に，自己投企に臨む者を襲うのは不安である。自分のやりたいことは何なのか。男と戦うことが長期の目標になるというのか。実存的な不安が男女を問わないものであってみれば，個人としての男と戦うことにたいした意味があるわけではない。男ももし目覚めるなら，弱さを抱えることに変わりはないのだ（次回に述べるが，「あらし」を書いたショパンは男と女の立場をとりかえて思考実験できる作家であった)。かといってフェミニスト流に「類」としての男と戦おうとするのがいかに無意味なことか――著者は主人公の行動を戦略的に誇張し，不自然さをきわだたせているように見える。また，独立させたのは，その先自身としていかに生きればよいか，途方に暮れさせるためでもあったろう。[9]

本来性の世界は苦しい。事実性の世界に頽落し――つまり，ふたたび日常の中へと眠り，夢を見続ければよいのか。主人公を夢見心地に自殺させながら，ショパンはいささかシニカルに，そう問うているのだ。この点にショパンのオリジナリティがあり，先駆性がある。

ショパン vs. フェミニズム

ショパンはフェミニズム，そしてリージョナリズムにほとんど重なりながら，先へと進んでいる――というところで冒頭の学生によるショパン＝フェミニスト批判に戻る。

学生がフェミニストを嫌うのは，取材によれば①「『女性』という一まとまりの『類』が存在し」，②「自分たちがその代表であり」，③「協力しない者は男の謀略に気づかぬばかものである」かのようにふるまうからである。(マイノリティに同一化させられるのを嫌がっているな，とフェミニストなら切り返すだろうが，ジェンダーをクラスやマイノリティと同一に扱ってよいかどうか怪しいものだし，思い当たる点も少なくない)。

問題は，この三つのポイントが『目覚め』に重なることなのだ。①ショパンは先述したように，主人公の対決する焦点を対個人から抽象的なものへとずらしている。これはショパンとしてはフェミニズムというイデオロギーから距離をとったと考えられるのだが，この距離自体が皮肉なことに，「類」的思考を連想させて，フェミニズムと共通の印象を招き寄せてしまうのである。著者の意図を共有しない者には，「個人と話し合うかわりに結婚という制度自体を問題にしようとするフェミニスト」の変種にしか見えないのだ。

③「本来性からの頽落」「覚醒」に関して言えば，これは実存主義的思考そのものがフェミニズムと一致している。現実の世界を非本来性の世界として否定され，「お前たちは頽落の状態にある」と言われると学生には「カチンと来る」（ショパン本人は必ずしもプラトン主義者ではないのだが)。さらに②「指導者を標榜するフェミニストの胡散臭さ」について言うなら，ドイツ観念論系の実存主義はキルケゴールにいたるとキリスト教形而上学を組み込んで「単独者」の観念を生み出す。立場を変えれば，「覚醒してるオレは偉い」式の発想と言われてもしかたがないのだ。

ポストモダニティ

学生がショパンを批判する経絡がおそらく上記のようだとすると，これは取るに足らないだろうか？　否，少なくとも実存主義と重なる部分には根拠があるといえる。ファシズム問題――das Man を離れて本来の個になろうとすることがいかにして逆に全体主義を導くか――はここでは問わないが，ハイデッガーと同じころ，精神病理学の分野ではブランケンブルクらが分裂病

の病態論において現象学の方法や実存主義的な発想に疑問を投げかけている。彼らは患者の日常に自明性が失われることに離人症の原因を見出し，エポケーを徹底するなら必然的に観察する主体の崩壊にもつながることを指摘した。いいかえれば①人間は実存として周囲と意識的に関係を取り結ぶ以前に，ハイデッガーの言う das Man として周囲と同調することを必要としている。本来性を強調し自明の日常性を軽視することは，この基盤を失わせることでしかない②エポケーを実践しながらデカルト的なコギトを温存，ましてや単独者を主張することは本来起こり得ない，という批判にもなっていたのである。同時代のギルマンとショパンを比較すると，ギルマンは前掲書で離人症のひややかな感覚とともに，覚醒が自我と外界の崩壊につながる可能性に（理由こそフェミニズムに還元しながらも）踏み込んでいたが，ショパンは離人症をフェミニズムに還元するにとどまって後者の領域には触れようとしない。

ショパン＝フェミニズム批判についてはどうか。第一に，学生のフェミニズム批判はまさにポストモダニズムの形而上学批判にほかならない。階級対立に無関心であると同時に，エリート的なものには反発するというのがポストモダニティの一つである。フェミニズムは二重の意味でうっとうしいのだ。ショパンと同一視することについては，かりにポストモダニティの前提を受け入れるなら，上記の論考にもかかわらず（あるいはそれゆえに）短絡とは言えなくなる。

ポストモダン以前の論者なら歴史的に考える。曰く，フーコーが指摘するように，「類」的な思考はダーウィニズムや自然主義やマルクス主義に共通する十九世紀末思想の特徴にほかならない。それに，西洋において形而上学が「覚醒者は偉い」を免れることは，キリスト教形而上学を免れられない以上不可能なのだ。ショパンとフェミニズムが類似しているのは当たり前であって，むしろ積集合は免罪して，差集合を追求したり起源を腑分けしたりする方向に進むべきだ。反抗心に富んだ女が，ついには当のフェミニズムさえ突き抜けてしまうというのが面白いのだから。

ポストモダン的思考，たとえば新歴史主義はそうではない。むろん，新歴史主義が通時的な歴史を無視するというのではない（それならインターテクスチュアリティと呼べば足る）。それどころか強引なまでに過去と現代との通時性を発見しようとする運動だと言うべきだ。だがそこで現代と過去との

関係は，ポストモダン以前の論者とは逆立している。階級闘争と evolution の観念が消滅したために，現在は過去より進化した状態ではなくなった。テリー・イーグルトンは『文学とは何か』「新版へのあとがき」で，スティーヴン・グリーンブラットはシェイクスピアを語るより学生運動の挫折を語っているのだと看破するが，新歴史主義は過去のなかに過去の共時的な地平における先進性を見出すよりも，現在の問題意識に基づいて現在（の悪弊）との共通性を見出す。この論文で言うなら，現代において重要なのはショパンよりフェミニズムであるのは明らかだ。したがって，以上のような論考は反フェミニズムのポストモダン学生にとってはショパンのオリジナリティを証明するものではなく，逆に実存主義を導入することによってフェミニズムの欠陥，なんなら形而上学全体の欠陥をヨリ本質的に解明するものと映るはずだ。

ある学生は自身の「ショパン論」をこう総括する。「自分をかわいそうだと思い過ぎたり，すごい人だと思い込んだり（まあ，その思い込むこと自体が才能だということもできますが……）して，自分は（みんなと違って，みんなより早く），気づいてしまった，なぜ他の人は目が覚めないの？みんなは鈍いから？と言いたいのだろうけれども（中略），そういう一見みんなのために言っている，しかし実際には自分さまの意見のひけらかし，優越感にひたりたいから，という心理状態にある人（そんな人は死ぬほど居ますが）には，御苦労様，そして余計なお世話だと思ってしまう人にとっては，そんな種類の人の話をだまって聞いているのは，つらすぎると思われます。」[10)]

こんなポストモダニティを生きる学生のためを思えば，ポストモダニズムを前提にして，ショパンを生かしてやる方策をこそ考えねばなるまい。

ひとつは方向転換して，別のショパン ── 形而上的でないショパンを探すことだ。ある流派のポストモダン論者によれば，ポストモダニズムは階級闘争を否定するからといって現状維持的であるわけではない。エリートが革命を指導するかわりにエリートそのものを否定し，進歩のかわりに徹底的破壊という目的論を奉じる，ヨリ根本的に subversive な思想なのだ。文化多元主義はそのひとつのあらわれである。この流儀でいけば，クリオールを切り口にコロニアリズムを適用することでショパンは再生するはずだが現実にそうなっているだろうか。多元主義はアナーキーどころか単なる相対主義だという批判は措くとしても，『目覚め』に関してはクリオール性を指摘しながら逆にそれを抑圧する著者の限界をつく論文のほうが冴えているように思

う。[11]

またある流派は大きな枠組みを捨て，ミクロな実践による問題解決にポストモダン状況の一つの帰結を見出す。保守的との批判もあり，恵まれた環境でしかありえないことでもあるが，ここ日本という文脈を考えれば有効である。抑圧された少数がルサンチマンをもって多数に立ち向かうという構図は，一九六〇年代後半以降，情況を適切に表象できなくなっている。加藤典洋の分析によれば，村上春樹が多数の読者に支持されるのも，自己と外部をめぐる問題の構図を情況に合わせてリアルタイムに変容させてきたからだとも考えられる。[12] ジェンダー・スタディーズの分野では，小浜逸郎の一連のフェミニズムに対する批評活動がこれにあてはまる。[13]（実は私も教室では学生たちに向けて小浜逸郎のように語っていたのだ）。ショパンの場合，現実に根差せ，とキャザーに批判され，現実を非本来性として異化したのだからまったく逆に思える。しかし次回に論じるが，『目覚め』以降，実質的に活動を停止するまでに書いた短篇において，ショパンは愛とロマンスや欲望を篩い分け，男女の日常的実践という領域に触れかかっている。ただし，『目覚め』以降にヨリふさわしい話である。

実は，『目覚め』の時点の形而上的なショパンをポストモダニティのなかで評価する方法は存在する。しかも前述したポストモダン的な手法で――つまりポストモダニズムという課題のためにショパンをだしにして。ただし，ポストモダニズムを批判する方向で。

イーグルトンは先述した『文学とは何か』「新版へのあとがき」の結びでこう予測している。「普遍的な価値を誕生させる物質的状況（中略）が到来するのなら，理論は，それが政治的に実現されたことになるので，余剰なものとなるだろう。そのあかつきには理論家は，安堵のため息をつきながら，彼もしくは彼女の理論化作業を終えることだろう。そして目先をかえて，もっと面白いなにかに従事することだろう」[14]（傍点引用者）。これは反語で，そんな状況は当面あるまいから（文学）理論に将来があるとイーグルトンは言っているのだが，いささか楽観ではあるまいか。アメリカの状況を考えるなら，ポストモダニズムと露骨なアクティヴィズムが連動しているのは明らかだ。イデオロギーの消滅が唱えられるほどにイデオロギーが突出する背理。文学研究者は日ごと「実践的」になってゆく。

ジェンダー・スタディーズがゲイ・リベレーションになるのが，いけない

というわけではない。しかし自分の立場を相対化することは必要である。たとえば，新歴史主義が，階級闘争を否定するゆえに現状や未来を崇めるのを止めたことは先述した。しかし，本当の順番はそうだったのだろうか。自身の挫折感が階級闘争を停止させ，進化を否定させたのでないという保証があるだろうか。イデオロギーを相対化できるのはイデオロギーの自意識以外にないではないか。「余計なお世話」はともかく，自身のために必要なことなのだ。そこで，エドナ・ポンテリエにはイーグルトンの「安堵のため息」にこう修正意見を出させたいのである。── そうかな，死ぬほど不安になるのではないかな。

注

1) E・ショウォールター『姉妹の選択』佐藤宏子訳，みすず書房，1996年，99－129頁。
2) 小見出し（"...sex fiction." ". . . an essentially vulgar story." etc.）を見れば明白。
3) "Books and Magazines, " *Pittsburgh Leader* 8 July 1899: 6. Included in Margo Culley ed. *The Awakening*, Second Edition, New York: W. W. Norton, 1994, pp.170-72.
4) "Fiction," *Literature* 4, 23 June 1899. Included in op. cit., p.168.
5) 現状の総括を兼ねて「適正」化の過程を追っておく。エドナの死（上記の②）について同時代の批評は姦通の懲罰と受け取ったが，フェミニスト批評はこれが作者にとって表向きの excuse にすぎないと看破する。新しい説明のしかたはさまざまである。怒りが男性中心社会の壁に突き当たり内攻して，悲劇的なことに，一番弱い自分に向いてしまったという説，ジェンダーからもセクシュアリティからも超越するのだ（『カラー・パープル』ばりに？）という説，あるいは，単に死なないと抗議小説にならないから？　これに伴って「目覚め」の意味も変化する。目覚めは姦通の罪を自覚することではなくて，結婚が男による抑圧であることに気づくことである。この点を自明とした上で，現在の批評は①のように目覚めにおける性の役割を追求することに集中しているように思われる。傾向としては「姦通小説」「セックス・フィクション」というレッテルを依然として意識し，弁解や正当化を行うもの，または著者が第6章で詩的に提示する海＝母性／孤独＝自立／誘惑＝性という（いわば）女性三位一体説において，性がいかなる役割をはたすか追究するものがある。

6) 『目覚め』瀧田佳子訳，荒地出版社，1995年，52頁。またアルセ・アロビンに手に接吻された夜「エドナは次から次へと夢を見て，熟睡できなかった」121頁。
7) たとえばPatricia S. Yaeger, "Language and Female Emancipation," *The Awakening*, Norton Critical Edition (see above)
8) 自然主義的な敗北主義と見立てるのは一見有効だが，後述するように時代からいって重なるのが当たり前なので，むしろ著者が母性／身体という自然に反発していることをこそ見なければならない。ラティニョール夫人の出産の扱いを見よ。また註6の，52頁の引用の続きは「体が必要とする眠りがおそってきた。彼女の精神を維持し，高めた，あふれるばかりの豊かさは，彼女に押し寄せた身体的状態をどうすることもできなかった」　「夢」と「眠り」の区別は重要である。cf. Michael T. Gilmore, "Revolt Against Nature: The Problematic Modernism of *The Awakening*," in Wendy Martin ed. *New Essays on The Awakening*, Cambridge UP, 1988, pp. 59-88.
9) 注5で触れた女性の三位一体説も，フェミニズムのマニフェストというよりは自分の足場の検討であるように見える。
10) 今野奈津子「『目覚め』ほかを読んで」大妻女子短大英文科　原典購読IIIレポート，1997年。
11) 数少ない，クリオールで冴えた論文としてAndrew Delbanco, "The Half Life of Edna Pontellier," in op. cit., 1988, pp. 89-108.
12) 加藤典洋編『イエローページ　村上春樹』荒地出版社，1996年。なお，作家は論旨に同意していないことを係け加えておこう。
13) 小浜逸郎『男はどこにいるのか』ちくま文庫，1995年など。
14) テリー・イーグルトン『新版　文学とは何か』大橋洋一訳，岩波書店，1997年，365頁。